

名古屋大学大学院工学研究科
エネルギー理工学専攻

辻 義之 教授

昭和 63 年卒業(第 47 回)



名古屋大学機械工学科を卒業して 30 年余りがたちました。今はその断片的な記憶しか残っていませんが、しばしその思い出にふけてみたいと思います。私たちの学年は、工学部 3 号館の北館と南館をつなぐ 321 号室で学部の講義を受けたと記憶しています。学部の講義は 1, 2 年生の一般教養の講義と異なり、専門の先生方がご自身で書かれた教科書を使って講義をされ、専門用語は英語で書かれていたことが、とても驚きでした。講義中は私語をする学生はほとんどなく、まじめに講義を聴いているか熟睡していたかでしょう。OHP を使われる先生もいましたが、黒板に板書され、私たちはノートに必死で書き写していました。3 年生のときに学科の研究室対抗ソフトボール大会がありました。機械科事務の女性の方に加わっていただいて、3 年生チームを作って参加しました。各研究室の教員職員の方々も参加されて、和気あいあいとして楽しい行事でした。3 年生の専門講義は難しく、講義数も多くありましたので、試験勉強が大変だったと記憶しています。また、毎週、学生実験がありました。内容は全く覚えていませんが、レポートが大変(苦痛)だったことは鮮明に記憶にあります。レポートはもちろん手書きでした。

学部 4 年生になると、各研究室に配属になりました。研究室を選ぶ際には、3 年生がみな集まり希望を黒板に書いて、人数が多い研究室はジャンケンで決めました。私はジャンケンをすることなく水力実験室に入ることができました。水力実験室は、工学部 2 号館の北側、工学部 7 号館の西側にあります。流体講座(中村育雄先生)と水力講座(菊山功嗣先生)の 2 つの講座が建屋の南半分、熱・伝熱講座が北半分に入っていました。ここで過ごした数年間は、数限りない思い出があります。総勢 30 名ほどの小さなコミュニティですが、各人が部屋と机をあてがわれ、研究テーマを与えられたことは新鮮な感覚でした。スマホもインターネットも発達していませんでしたから、何をするでもなく研究室に入り浸って、

論文を読んだり、疲れるとマンガを読んで、毎日を過ごしていました。何時から何時まで研究室に来るよという規則もなく、夜中にひよっことやって来る者もいました。ゆっくりと、でも少しだけ充実した時間が流れていた思いがあります。

水力実験室の2階にはちょっとしたスペースがあり、卓球台が置かれていました。夕食後の気晴らしに、2人で卓球をはじめると、3人4人と2階に集まり、あっという間に20人以上の卓球大会が始まりました。気が付くと、夜12時近くになり、急いで帰宅の準備を始めることもしばしばでした。当時は、大学のゲートが12時に閉まりましたので、車で来ている学生が多かったため、急いで大学を出ました。夏の暑いさなかには、山の上のグラウンドで研究室対抗の野球大会がありました。水力・流体チームは、なぜか団結力があり、勢いだけで毎年トーナメントを勝ち上がったものでした。今でも機械科では野球大会はあるのでしょうか？

学部を卒業した後に、修士、博士と進みました。博士課程に進むときには、やりたいことをしてみようと将来のことは漠然としか考えていませんでした。紆余曲折はありましたが、幸いにも名古屋大学工学研究科のエネルギー理工学専攻にポストを得ることができました。研究室は水力実験室から山手四谷通を横切って農学部のあるキャンパスの端っこ（工学部6号館）にあります。農学部横の道を歩くと鶏の鳴き声が聞こえてきたり、実習農場がひろがり、桑畑が一面にありました。新しい環境に移ってから20年余りが過ぎました。その間に名古屋大学のキャンパスは、耐震改修も含め新しい建物が建ち一新しました。地下鉄名古屋大学駅（学生当時はありませんでしたが）を降りると、高層の建屋が立ち並びます。名古屋大学を世界に知らしめたのは、ノーベル賞の受賞で、そのミュージアムもつくられました。久しぶりに大学を訪れた方は、その変化に驚かれることと思います。

大学の中は、いつの時代もそうなのでしょうが、環境の変化が絶えません。じっくりと腰を落ち着けて基礎研究に取り組めるという姿勢は、名古屋大学工学部からもなくなりつつあると感じています。私たちの学生時代と比べてしまうからでしょうか、いまの学生さんたちの雰囲気も生活も大きく変わっていると感じます。講義をしていると、帽子をかぶって聞いている人、ご飯を食べ忘れたのでしょうかパンをかじっている人もいました。私の講義では、昔ながらにひたすらホワイトボードに板書をしますが、スマホで写真を撮るカシャという音がよく聞こえてきます。最近では講義のアンケートがあり、学生さんが教員を評価するシステムが欧米に倣って導入されています。教員も手を抜いて講義できないという状況です。キャンパスの中にはお洒落なレストランやカフェができて、図書館にはスタバコーヒーが入りました。図書館の中では自由に議論できるスペースもあり、講義で使ったこともあります。よい環境になったと思います。キャンパスを歩いていると、留学生の姿が目立つようになりました。9月から始まる学期もあり、英語での講義もふえました。私たちの機械科クラスには、タイからシヤイナポン・デーシャさんが留学されていました。当時は留学生の数も少なく、彼は間違いなくエリートで、一生懸命に勉強をしていた姿が忘れられません。彼にはいつか再会をしてみたいですし、彼の国の留学生とぜひ学んでみたいと思っています。

ます。

水力実験室で共に過ごした仲間たちとは、いまでも年に一回会う機会があります。いつも幹事を引き受けてくれる信州大学の吉田君のおかげです。その会合は「大遊会」といって、勉強をあまりしなかった私たちにはよくあったネーミングです。皆さん白髪交じりのおじさんになりましたが、会えば心だけは若いころに戻り、水力実験室で過ごした日々を楽しく思い出しています。当時の職員だった朝倉さんも毎年参加されて(たぶん、一番お元気で)、いっそう会話がはずみます。最後まで開発が残された水力実験室と工学部7号館地区も数年のうちには取り壊されて、高層化した建物が作られると聞きました。卒業後、東山会には参加することはありませんでしたが、平成26年の新年同窓会に初めて参加しました。新美研究科長(当時)のご挨拶と乾杯の音頭で和やかに始まったこと、懐かしい方々と再会できたことがまだ記憶に新しいです。これからも東山会が末永く引き継がれていくことを卒業生の一人として願っております。



昨年度の大遊会：山梨県笛吹川温泉 別邸 坐忘